

あしよろ・ハードサポート通信

今年の足寄の夏は例年に比べると穏やかですが、それでも昼間は気温が高い日もあります。乳牛は暑さに弱く、暑熱ストレスを受けるとさまざまなロスが出て生産を落としてしまいます。今回は牛舎まわりでの暑熱対策の工夫についてご紹介します。

◆ 牛を「冷やす」

暑熱対策は牛を「冷やす」ことから始まります。手っ取り早いのは換気扇での送風で、足寄町内でもたくさんの牛舎で換気扇が回っています。また、泌乳牛だけではなく、乾乳牛を冷却することで、次乳期の乳量が増えることもわかっています。

繋ぎ牛舎では、施設上の制約がなければ、換気扇は通路ではなく、牛床の上から牛に向けて吊るすのが理想です（写真1）。フリーストール牛舎での換気扇設置の優先度は①パーラー前の待機室（写真2）、②分娩房、乾乳後期牛のペン、③搾乳牛の飼槽、④搾乳牛のベッド、⑤病畜ペン、とされています。



写真1：牛に向けて換気扇を吊るしている繋ぎ牛舎



写真2：待機室は毎回ギュウギュウ！換気扇は必須



写真3：換気扇＋飼槽の上からミスト状の水を噴霧



写真4：パーラー出口に簡易シャワーを設置し、そこを通る牛の背中をしっかりと水でぬらす

写真3、4のように水の気化熱を利用して牛をしっかり冷却する酪農場が北海道内にも増えてきました。繋ぎ牛舎でのミスト設置の事例もあるようです。

※ 水を使った冷却は、必ず換気扇での送風とセットで実践しましょう。

◆ 施設の温度を下げる工夫

牛舎内で牛を冷やすのと一緒に、施設の温度を下げることでより快適です。写真5は牛舎の屋根に園芸用スプリンクラーを設置して散水している様子で、写真6は繋ぎ牛舎の窓にスタレを掛けて直射日光を避けているところです。



写真5：繋ぎ牛舎の屋根にスプリンクラーで散水



写真6：窓にスタレを掛けて遮光



放牧をしている場合は、牛が直射日光に当たりっぱなしにならないよう、日中は、必ず木陰がある放牧地に出すようにします。

また、放牧、繋ぎ、フリーストール飼養に関わらず、いつでも清潔な水をたっぷりと飲める環境を整えることも重要です。

※水槽がぬめりやすい時期でもありますので、定期的な掃除もおすすめします。

牛に暑熱ストレスがかかるとエサの採食量が落ち、免疫力も弱まり、乳量低下や乳房炎の多発、繁殖成績の低下、分娩時のトラブルといった生産ロスを引き起こし、さらには秋の蹄病の発生にもつながります。

近年では北海道も6月から9月頃まで暑熱期が続くようになりました。この4か月は営農年度の1/3に当たり、この時期に牛が受けたダメージが経営に与える影響は決して小さなものではありません。暑熱対策が万全か、何か工夫できる部分はないか、夏場の生産ロスの引き金になっているのはどんなところか、牛舎に行ったときに改めてぐるりと見回してみてもいいかもしれません。(久富聡子)

- ・ IDEXX 社の乳汁での妊娠検査の無料トライアル期間は、7月末までです。授精28日以降の乳汁で妊娠検査ができ、乳汁サンプルは集荷のローリーが回収してくれます。詳細は営農部、または生乳センターへお問い合わせください。